漱石山房の冬

芥川龍之介

わたしは年少のＷ君と、旧友のＭに案内されながら、久しぶりに先生の書斎へはひつた。

書斎は此処へ建て直つた後、すつかり日当りが悪くなつた。それから支那の五羽鶴の毯（たん）も何時の間にか大分色がさめた。最後にもとの茶の間との境、更紗の唐紙のあつた所も、今は先生の写真のある仏壇に形を変へてゐた。

しかしその外は不相変である。洋書のつまつた書棚もある。「無絃琴」の額もある。先生が毎日原稿を書いた、小さい紫檀の机もある。瓦斯煖炉もある。屏風もある。縁の外には芭蕉もある。芭蕉の軒を払つた葉

うらに、大きい花さへ腐らせてゐる。銅印（どういん）もある。瀬戸（せと）の火鉢もある。天井（てんじやう）には鼠の食ひ破つた穴も、……

わたしは天井を見上げながら、独り言（ごと）のやうにかう云つた。

「天井は張り換へなかつたのかな。」

「張り換へたんだがね。鼠のやつにはかなはないよ。」

Mは元気さうに笑つてゐた。

十一月の或夜（よ）である。この書斎に客が三人あつた。客の一人（ひとり）はO君である。O君は綿抜瓢一郎（わたぬきへういちらう）と云ふ筆名のある大学生であつた。あとの二人（ふたり）も大学生である。

しかしこれはＯ君が今夜先生に紹介したのである。その一人は袴をはき、他の一人は制服を着てゐる。先生はこの三人の客にこんなことを話してゐた。「自分はまだ生涯に三度（さんど）しか万歳を唱へたことはない。最初は、……二度目は、……三度目は、……」制服を着た大学生は膝の辺（あた）りの寒い為に、始終ぶるぶる震へてゐた。

　それが当時のわたしだつた。もう一人の大学生、――袴をはいたのはＫである。Ｋは或事件の為に、先生の歿後来ないやうになつた。同時に又旧友のＭとも絶交の形になつてしまつた。これは世間も周知のことであらう。

又十月の或夜である。わたしはひとりこの書斎に、先生と膝をつき合せてゐた。話題はわたしの身の上だつた。文を売つて口を餬(こ)するのも好(よ)い。しかし買ふ方は商売である。それを一々註文通り、引き受けてゐてはたまるものではない。貧の為ならば兎(と)に角(かく)も、慎(つつし)むべきものは濫作である。先生はそんな話をした後(のち)、「君はまだ年が若いから、さう云ふ危険などは考へてゐまい。それを僕が君の代りに考へて見るとすればだね」と云つた。わたしは今でもその時の先生の微笑を覚えてゐる。いや、暗い軒先の芭蕉(ばせう)の戦(そよ)ぎも覚えてゐる。しかし先生の訓戒には忠だつたと云ひ切る自信を

持たない。

更に又十二月の或夜である。わたしはやはりこの書斎に瓦斯（ガス）煖炉の火を守つてゐた。わたしと一しよに坐つてゐたのは先生の奥さんとMとである。先生はもう物故（ぶつこ）してゐた。Mとわたしとは奥さんにいろいろ先生の話を聞いた。先生はあの小さい机に原稿のペンを動かしながら、床板（ゆかいた）を洩れる風の為に悩まされたと云ふことである。しかし先生は傲語（がうご）してゐた。「京都（きやうと）あたりの茶人の家と比（くら）べて見給へ。天井（てんじやう）は穴だらけになつてゐるが、兎（と）に角（かく）僕の書斎は雄大だからね。」穴は今でも明いた儘である。先生の歿後七年の今でも……

その時若いW君の言葉はわたしの追憶を打ち破つた。
「和本は虫が食ひはしませんか？」
「食ひますよ。そいつにも弱つてゐるんです。」
Mは高い書棚の前へW君を案内した。

× × ×

三十分の後（のち）、わたしは埃（ほこり）風に吹かれながら、W君と町を歩いてゐた。
「あの書斎は冬は寒かつたでせうね。」
W君は太い杖を振り振り、かうわたしに話しかけた。

同時にわたしは心の中にありありと其処を思ひ浮べた。あの蕭条とした先生の書斎を。

「寒かつたらう。」

わたしは何か興奮の湧き上つて来るのを意識した。が、何分かの沈黙の後、W君は又話しかけた。

「あの末次平蔵ですね、異国御朱印帳を検べて見ると、慶長九年八月二十六日、又朱印を貰つてゐますが、……」

わたしは黙然と歩き続けた。まともに吹きつける埃風の中にW君の軽薄を憎みながら。

（大正十一年十二月）

底本：「芥川龍之介作品集第三巻」昭和出版社
　　　１９６５（昭和40）年12月20日発行
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９９年１月26日公開
２００３年10月７日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。